

アイルハルト・フォン・オーベルク
『トリストラントとイザルデ』 (4)

小澤昭夫訳

7 媚薬 (続き)

トリストラントとイザルデ、媚薬を飲むに至る

船が港に着いてから優に一時間が過ぎた頃、トリストラントはイザルデのもとへ赴き、彼らが更に旅を続けるべきか否か尋ねようとした。

その時、トリストラントはひどく喉が渴いていたので、飲み物を求めた。献酌役の召使はあいにく不在であった。

「ここにぶどう酒があると思います」と侍女の一人が言った。

トリストラントはそれを持って来るよう命じた。これぞ彼の不幸の始まりであった！侍女はその飲み物を持ってきてトリストラントに渡した。

彼は全く考えもしなかった。それが災いをもたらすものだとは。彼は躊躇いもせずにそれを飲んだ。彼にはそのぶどう酒が上等だと思われた。

そこで彼はイザルデにそれを手渡した。彼女もまたすぐに飲んだ。

[二人がそれを飲んだ後、二人を襲ったのは熱烈な愛の欲求であった。]¹⁾

その時、二人がもし互いに愛し合うことができなければ、正気を失うのではないかと二人には思われたのである。(2445-2468)けれども、なぜこんなにも急に相手のことが好ましく思えるようになったのか、この時はまだ二人とも解らなかった。後に二人はそれを知ることになるのだが。

二人はその気持ちを隠そうとするが、すぐに頬が青くなったり赤くなったりするの

であった。おのおのが、相手から死を貰うのではないかと思った。それほどに二人の間の愛は心ならずも激しくなったのだが、それはすべて愛の飲み物の所為であった。

イザルデは、見目麗しいトリストラントを唐突にこんなにも愛するようになったことをひどく恥じた。トリストラントもまた、愛の虜となって塞ぎ込んでいた。この愛が彼に激しい苦痛をもたらしていた。二人とも以前とは違った振る舞いをするようになった。(2469-2490)

二人は、時には熱さを時には寒さを感じ、顔は青ざめたり赤く火照り、すすり泣いたりしたのである。二人は、それぞれに相手をこんなにも愛するようになったことで、不安であったが、二人には解らなかった。どんな理由で相手がそんなに苦しんでいて、それを隠しもしないのか。(2491-2500)こんなことが短時間の内に起きていたのであった。苦しみのあまり、トリストラントはもはや耐えられなかった。ふたりとも激しい心の痛みを感じていたが、横たわっているばかりで、苦しみの理由をだれにも話さなかった。二人はそれを心中深く隠したのである。(2501-2508)

私が既に述べたように、トリストラントとイザルデは、昼も夜も激しい痛みを苦しんでいた。「ああ、神さま」²⁾イザルデは言った。「あなたにお仕えする哀れな女の

¹⁾ Buschinger/Spiewok の Nhd. 訳では、この状況説明的な一文が 2464 行と 2465 行の間に挿入されている。

²⁾ 原文 *lieber got min* (2512)。これに続くイザルデのモノローグは 2717 行までおよそ 200 行に渡っている。Prosaroman ではこのモノローグに 70 数行があてられている。G 作にはこれほど長いモノローグは見られない。

苦しみを御覧下さい。嫌悪すべきなのに好ましいこの男のために胸に抱えている苦しみを。どう言い表せばいいのでしょうか。心の中では、彼を愛していることを喜んでい

るのです。(2509-2519)

彼なしでは、私が救われることはありません。彼の所為で、私は食べることも飲むこともできません。このままではすぐに病気になるって命を失う羽目になります。哀れな女の私はどうしたらいいのでしょうか。彼が私を求めているとしたら心配です。どうして私は彼を愛しているのかしら。愛している？なぜこんなことを言うのかしら。彼を憎み、いつまでも敵意を抱くのが当然なのに。(2520-2529)

天と地の間で、彼よりも優れた人はいません。常に有能であろうと努め、実際幾度もそれを証明しました。英雄に期待されることを、彼は独りでやり遂げる勇気があります。彼が有能なことは十分承知しています。彼は勇敢で善良で、見目麗しく快活で、正直で礼儀正しく、賢明です。彼は名誉を得ようと努めています。これ以上何を言えばいいのかしら。かつて女が得た中で、彼は最も優れた男です。美德の点でも欠けるところはあります。(2530-2545)

彼に関するこんな話を何度も聞いていたので、私の心は彼に好意を寄せているのです。彼は黄金にも勝っています。銀が鉛に勝るように。彼を愛していないのだから。彼が有能であるが故に好ましく、それがまた辛いのです。

主なる神さま³⁾、我が身に何が起こったのでしょうか。何度も彼を見てきたのに、今になってとても好ましく思えるなんて。ああ、心と分別よ、なぜお前たちは彼から離れられないの。(2546-2557)

³⁾ 原文 Herr (2553)。Lichtenstein 版では、Hère got (2439)である。

『誰が我々にそれを教えてくれるの』

『私はそれを話したくない』

『我々にはそれを学ぶ勇気がありません』

『なぜ』

『愛が我々に教えたのです。彼のことだけを考えるように。我々は敢えて愛を弱めたりはしません』

『ああ、私をこんな目に遭わせているのが愛なの。愛がこんなにも私を苦しめるとは思わなかった。哀れな私はあなたから何の罰を受けるのでしょうか。愛が私をこれほど苦しめるなんて。(2558-2571)

愛については、良きことと喜ばしいことばかり語られるのを聞いてきました。哀れな私は信じていました。愛とは甘美な良いものだ。今はしかし愛がこんなにも苦しくて、酔のように応えます』⁴⁾

ああ、アモル夫人さま⁵⁾、いつあなたは私にとって甘美なものとなるのですか、私があなたを誉め称えることができるように。

クピド、愛の神さま⁶⁾、私がああなたの命令を無視しましたか。哀れなイザルデが、あなたの意に反して、避けるべきだった何かをしたのなら、あなたは手酷くその報復をなさいました。私の心は壊れました。あなた様の所為で。(2572-2589)

あなたが厚意を示してくださらなければ、私は生き長らえることができません。あなたが私に無慈悲であり続けるならば、私の不幸は増すばかりです。苦しみを少し和らげてください。あなたに耐えられるように。他の女たちには、あなたは私に対するほど無慈悲ではありません。私はあなたに何をしたのでしょうか。(2590-2598)

⁴⁾ 末尾の』は、2566行の引用符『、訳文では9行上、に対応させるため訳者の判断で補った。

⁵⁾ 原文 frow Amor (2578)、Lichtenstein 版では frauwe Amûr (2464)。

⁶⁾ 原文 Cupido, der minne got (2581)

悲しみと苦しみを耐えられる以上に抱えているのに、これからも嘆くのです。筋が通らないと思います。あなたが私を、分別をなくすほど激しく攻めて打ち負かすのは。王妃にはなりましたが、あなたのことは何ひとつ知りませんでした。あなたは私を魔法で虜にしました。私の身に奇妙なことが起こりました。気持ちが定まらなくなったのです。前には炎の中にいるように熱かったのに、今度は氷のように冷たくなり、その後また全身から汗が流れるほど熱くなります。こんなことが長く続いていて、これが終わらなければ、死ぬに違いありません。(2599-2618)

ミンネの女神さま⁷⁾、どの軽率な行いによって、私はあなたの好意を失ったのですか。こんなに激しく怒りを私にお向けになるなんて。哀れな私に苦痛を与えすぎです。女神さま、戯れ言ではありません。訳もなく私に怒りを向けていますよ、あの優れた騎士のことで。私は彼を愛しています。彼が私を愛する以上に。(2619-2629)

ああ、女神さま、私を哀れと思し召してください。気高い女神さま、本当は彼にお怒りになるべきです。私は彼を愛しているのに、彼が私を愛していないのは確かですから。女神さま、私はあなたにお仕えします。ですから、あなたは当然私に好意的であるべきでしょう。というのも、私は一人の男を心底愛しているからです。女が男をこれ以上に愛したことがないほどです。この上私に何をなさるおつもりですか。御承知おきください。あなたのために命と名誉を賭けていることを。私を哀れとお思ってください。ああ、女神さま、あなたは私の心に耐えがたい苦痛を与えています。女神さま、あなたの絶大な力が、私を熱くしたり

冷たくしたりするのです。(2630-2648)

女神さま、私はあなたに付き従います。温情をお示してください。女神さま、あなたの足元にひざまずいてお願いします。私から心配を取り除いてください。

女神さま、わたしは生きては行けません。あなたが慈悲を示してくださらなければ。私を憎むのならば、女神さま、私は正気を失います。女神さま、どうか私にお慈悲を、遅くならないうちに、私が死ぬ前に。お慈悲をお示しくださるなら、今こそその時です。(2649-2660)

女神さま、あなたは私を破滅させ、あなたにお仕えする女を死に追いやることが出来ます。女神さま、私をこの苦境から助け出してくださらないなら、私は今すぐにも死んでしまいます。ああ、あなたは何と苦痛を与えることでしょうか。でも、あなたには私を苦しめる理由があるに違いない」(2661-2666)

イザルデはさらに続けた。

「主なる神さま、私はどうしてこんなことになったのでしょうか。私はあの人を愛しています。私の愛に応える気持ちなど持ったこともない人を。父が私を正当に彼と婚約させようとしたとき⁸⁾ その勇士は拒絶し、私には無関心でした。(2667-2675)

私は今、私の心を彼から引き離すつもりです。心よ、あの気高い英雄への思いを募らせてはなりません。私は、私の心を彼からよそへ向けるつもりですから。でもどうすれば、彼を避けることができるだろう。たとえそうしても、私のためにならないのではないかと心配です。私には死ぬよりも愛することの方が大事です。彼の妻にならなければ、私は確実に死にます。ああ、彼が知ってくれたらいいのに、彼のために私

⁷⁾ 原文 frow Minn (2619)。Lichtenstein 版では、frawe Minne (2505)。これ以降 2663 行にかけて、Minn, frow riche(2631)と Minn (2626etc.)が頻出する。

⁸⁾ イザルデの父、アイルランド王は、国を荒らしていた竜を退治した者に王女のイザルデを与えると約束していた。

が堪え忍んでいる苦しみを。(2676-2693)

私の悩みを彼に知って貰うには、どうすべきなのでしょう。それを彼に打ち明けねばならないと思う。ああ、でもどうすればいいのだろう。もし彼が、あり得ることだけど、私のことを良く思わなければ、この日のことは心に焼き付いていつまでも忘れられまい。思うに、私は名誉を危険にさらそうとしている」

美しい婦人は嘆いた。

「それを言うよりも前に、私は死にたい。(2694-2705) いいえ、それはひどすぎる。

そんなことがあってはならない。それでも、私が彼を心底愛していることを知れば、彼もまた私に心に向けてくれるかも知れない。運に任せて、彼に伝えよう。私が今どんな状態かを。もしかしたら、悪くはとらないかもしれない」

このように誠実なイザルデは篤と考えた。彼女は不安と悲しみにしっかりと捉えられていた。というのも、彼女は自分の心をその男からもはや引き離すことができなかったからだ。(2706-2721)

一方、トリストラントもまた同じ感情に捕らわれていた。美しい乙女のことを、昼となく夜となく考えるばかりで、ただ彼女のことを思う以外にはもはや何ひとつ手に付かなかった。このように兩人とも一方ならず苦しんでいた。

さて、トリストラントとイザルデは、三日と半日、飲まず食わずで臥せっていた。自分にも周囲にも無頓着で、ふたりとも飢え死にしそうであった。しかし、パンもぶどう酒も彼らの助けにはならず、恋に病み続けねばならなかった。(2722-2736)

どういう事態になっているのか不審に思ったのは、クルネヴァルと誠実な人ブランゲーネであった。彼らは、二人のことが心配になり、次のように相談し合った。

「哀れな私たちは、何をしたらいいのでし

よう。ご主人お二人を失っては、取り返しがつきません。疑うまでもありません」

その時、美しい娘ブランゲーネが愛の飲み物のことを思い出し、それを保管していた婦人部屋へ急いで行った。しかし、仕舞って置いた場所にそれを発見できなかった。立ち竦んでわが身の不運を嘆いた。

「ああ、なんとということ。トリストラント殿とイザルデ様。お二人はもう終わりです」彼女は悲嘆にくれて続けた。(2737-2755)

「お二人にあの飲み物を渡した者は、災いに遭うがいい」

ブランゲーネの心は、悲しみに満ち溢れていた。彼女は戻って来ると、クルネヴァルに言った。

「何が起きたのか、よく解りました。あなたのご主人とわがご主人さまは、死ぬ定めです。悲しくてなりません。(2756-2764) お互いこんなに恋い焦がれているのですから、同衾して思いを遂げない限りは、お二人は救われません。どうすればお二人はこのことに気づくでしょう」

ブランゲーネはさらに続けた。

「お二人をこの苦しみによって死なせるよりも、私が命と名誉を捨てるつもりです」

善意の人クルネヴァルも言った。

「私も先に死にたいものです」

ブランゲーネとクルネヴァルは、相談の結果、トリストラントとイザルデの二人を一緒にさせようと決めたのであった。そして、もし二人が自らそうしようと思わなければ、そうするように仕向けよう。

ブランゲーネの嘆きは収まらなかった。

「お二人がああ飲み物を飲まなければ良かったのに。このことでは私にも責任があります。でも、幸運をあてにしましょう。(2765-2783) クルネヴァル殿、あなたのお役目を果たして下さい。お二人と一緒に私のところへお連れ下さい。これ以上お話しすることはありません。もしお二人の命が

失われるなら、私たちは生まれてこない方がよかったです」

それから四日後に、一行はある港に着いた。船乗りたちが上陸した後、クルネヴァルは彼の主人に頼んだ。イザルデのもとへ行き、彼女がどう過ごしているか確かめるように。そうしたら、彼の具合も良くなるかもしれないと。

「あの方のどこがお悪いのかは存じません」

このようにクルネヴァルが話したのは、考えがあつてのことだった。

「あの方もまたお知りになりたいかもしれません。お二人の病がどんなものなのか」トリストラントはクルネヴァルの頼みに応じて出かけていった。(2784-2800)

婦人部屋に足を踏み入れたとき、彼は全身の力を失って一誰が望んだのやら一、中に進むことができず、最愛の人がどんな具合なのか尋ねることもできなかった。

イザルデは、彼の姿を見るやいなや驚きの声を上げ、それから言った。

「トリストラント殿、こちらへいらして、ぐずぐずなさらないで。さもないと、あなたの名誉にかかわります」

トリストラントは心中ひそかに考えた。

「彼女がお前にこの大きな名誉 (Herr と呼び掛けたこと) 与えてくれるのは、好意からではない。彼女にはお前が気に入らないのだ。もし彼女がお前に好意を持っている

なら、お前を『殿 (Herr) 』と呼びはしない」

こう考えて彼は辛くなった。(2801-2819)しかし、彼の心はすぐに反論を唱えた。

「お前を苦境から助け出すために、彼女はお前に『殿 (Herr) 』と呼び掛けたのだ。だとすれば、本当はお前が彼女にとって男の中で最も好ましい男ということだ。つまりは、お前が彼女の心の主人であるという意味だ」

彼はこう考えると嬉しくなって力を取り戻し、彼女に歩み寄ると側に腰を下ろした。これぞ二人の助言者 (ブランゲーネとクルネヴァル) にとって喜ばしいことであった。彼らはそれ以上時を無駄にせず、急いで婦人部屋を後にした。(2820-2831)

私は確信している。その時、婦人部屋には、トリストラントとイザルデと愛のほかには誰も居なかったと。

私は知らない。二人のどちらが先に話し出したのか。しかし、その時、それぞれが相手に、それまでどんな具合だったのかを語り、別れる頃には、二人ともすっかり健康になっていたのは確かである。二人は言葉では表せないほど幸福だった、と私は思う。

二人は時間が長いとは感じなかった。二人は一緒に寝て、愛の喜びを享受したのであった。船が進んでマルケ王の国の海岸が見えてくるまで。(2832-2846)

8 ブランゲーネ

イザルデのために犠牲になること

ある晩遅くに、二人は相談の結果、ブランゲーネにお願いすることにした。彼女がイザルデのために、初夜にマルケ王と寝て、愛を交わしてくれるようにと。

この策略は、マルケ王を欺いて、イザル

デの不倫⁹⁾を隠すために考え出されたのであった。その役目を、イザルデはブランゲーネに負わせたのだが、それは彼女が世間

⁹⁾ 原文は *huorentuom* で、大 *Lexen* には *<stn. prostitutio>* とある。このラテン語に『研究社羅和辞典』(田中秀央編)は、「1 売春, 売淫. 2 凌辱, 貞操を犯すこと。」の意味を与えている。

での自分の名声と名誉を失わないためであった。この不当な要求を聞いたとき、ブランゲーネは激しく泣いた。(2847-2861)

諸君、聞き給え。イザルデが彼女に初めてこのお願いをしたとき、どんな言葉で始めたか。

「ねえ、ブランゲーネ、あなたの助けが要ります。王様と床入りするとき、どのように振る舞うべきか解らないのです」

ブランゲーネが言った。

「私にはわかりません」

イザルデが言った。¹⁰⁾

「なぜそのように答えるの」

「何を話せとおっしゃるのですか」

「良い助言をするのです」

「私にはできません」

「それなら私は幸福のすべてを諦めねばならない」

「それは私には辛すぎます」

「だから抜け目なく切り抜けるのです」

「どうすればできるのですか」

「私のために或ることをして欲しいの」

「どうするのか、お聞かせ下さい」

「初夜に王様としばらくの間一緒に寝ておくれ」

「それは名案とはいえません。私は決してしませんから」

「そのためなら、私は奉仕と友情であなたにお礼します」

「どのようになさるおつもりですか」

「すぐにわかります」

「あなたのご奉仕を疑いはしません」

「それならどうかお願い」

「悪いご冗談でございましょう」

「ああ、わが身に起こることが恐ろしいの

です」

「こんな話をなさるのはあなたに相応しくありません」

「これを諦めることはできません」

「そんなことを私に求めてはなりません」

「そんなことを言わずに、助けておくれ。

この償いは一生かけてしますから」

「姫さま、これまで私はあなたに従ってきました。それをお考えください。名誉もすべて失うほど、私を辱めないでください」

「私はあなたに、もはや良きことも喜びももたらすことは出来ません。私自身にもです。あなただけがそれを防げるのです」

「わが身に不名誉と不幸が降りかかるのも当然です。私がああ飲み物をしっかり保管しなかったのですから。こうなったからには、私の誠実さをあなたに証明いたします」すると、姫君はこう言った。

「神のお慈悲とあって、どうか私をこの苦境から救い出しておくれ」

ブランゲーネは答えた。

「姫さまを苦境から助け出してあげます。でも、もし選べるのなら、こんなことをするよりは、死を選びたい」(2862-2915)

マルケ王のもとへ赴いた二人が奇妙な策略を用いること

イザルデはすぐにトリストラントに知らせた。彼女の願いを叶えるとブランゲーネが約束してくれたと。それを聞いてトリストラントは喜んだ。彼はマルケ王に使者を送り、君命によって彼が探し出し伴ってきた花嫁を出迎えるようにと伝えさせた。

マルケ王は、彼らを迎えに直ちに海岸へ出向き、彼らに歓迎の挨拶をした。マルケ王は、花嫁を堂々と誇らしげにティンタヨールへと導いて行った。結婚式は盛大に執り行われた。

さてトリストラントは主人のマルケ王に抜け目なく伝えた。

¹⁰⁾ 原文では、この後も、ブランゲーネとイザルデの発言の前にはそれぞれ *Brangenen sprach* (ブランゲーネが言った) / *Ysalde sprach* (イザルデが言った) が、2902 行にかけて 12 回繰り返し挿入されているが、ここでは省略する。

「王さま、お妃さまがあなたに、あの方の国の習慣に従って振る舞ってくださるようお願いしても、あの方をお怒りにはなりません」

すると王はすぐに尋ねた。彼女の国にはどんな習慣があるのかと。

トリストラントはすぐさま答えた。

「私から申し上げますが、お妃さまが初めてあなたと床入りをなさるとき、あなたのお側に明かりがあってはならないのです。お妃さまが翌朝起床なさるときまで、誰一人そのお姿を見ることができないように」
(2916-2946)

王は、イザルデの願いを尊重すると請け合い、甥のトリストラントには、王の寝室の侍従を務めるよう求めた。そして、どうすべきか良く知っているのだから、彼自身が明かりを消す¹¹⁾ようにと命じた。更にまた彼は、王妃が望むことなら何でも果たすようにと命じられたが、それこそ彼が切に願っていたことであった。(2947-2955)

さて、王の寝室の管理役となったトリストラントは、王が床に入って休もうとしたとき、王妃が望んだ通りに彼女の望みを叶えたのである。彼は、暗中密かにブランゲーネを王の寝床へ連れて行った。

これぞトリストラントが行った最悪の欺瞞行為であった。というのも、彼は同じときに同じ寝室で王妃と寝ていたからである。

しかし、彼の行為を背信と呼ぶことはできない。なにしろ彼は、わが意に反して行動していたのである。すなわち、あの呪われた飲み物¹²⁾が、彼にそうさせたのであった。

真夜中になると、ブランゲーネが密かに床を抜け出してきて、王妃に起きて夫のところへ行くよう求めた。王妃は、床を出て、

王のところへ行った。こうしてマルケ王は欺かれたのである。(2956-2976)

イザルデのブランゲーネ殺害計画¹³⁾

トリストラントがマルケ王を欺いたことは、誰にも覺られることはなかった。こうしてトリストラントは宮廷に腰を落ち着けていた。¹⁴⁾

しかしある時ついに、彼はクルネヴァルに自ら打ち明けたのであった。一日とて離れてはられない、王妃の姿を見ずにはいられない、さもないと死んでしまうと。王妃もまたまったく同じ気持ちであった。

それから間もなくして、王妃は、美しい人ブランゲーネが彼女のために尽くしてくれたことに対して不当に¹⁵⁾報いようと考えに至った。ブランゲーネが、王妃の行いについて知っていることを、人に話すのではないかと恐れたからである。それゆえ王妃は、策を用いてブランゲーネの命を奪おうとしたのである。これは何とも邪悪な思いつきであった。(2977-2995)

斯くして、イザルデは二人の貧しい騎士に¹⁶⁾、ブランゲーネを殺すように命じた。そして、彼らがそうしてくれるなら、銀60マルクを与えると約束した。

二人は、王妃が頼んだことを喜んで果たすと誓った。王妃は、彼らに銀を与えると、ある場所に行って泉を見張るように指示し

¹²⁾ 原文 *der gar unselig tranck* (2969)

¹³⁾ この小見出しは、原文にはないものだが、Buschinger/Spiwok の Nhd. 訳に従っている。

¹⁴⁾ Lichtenstein 版(2853 行)、M 写本(2854 行)では「1 年の間」*ein jar* である。Prosaroman でも同様に「丸一年の間」*ein ganz jar* (1434 行)である。

¹⁵⁾ 原文 *unreht* (2989)。Lichtenstein 版では、「死をもって」*mit des tôdes dône* (2865)、Prosaroman でも「死をもって」*mit dem tod* (1451)である。

¹⁶⁾ 原文 *zwain armen rittern* (2996)。G 作においては、イングランド出身のこの土地の者ではない二人の *kneht* 「小姓」であり、二人を騎士に取り立てることが、イザルデの約束する報酬の一つである。

¹¹⁾ G 作では、明かりを消すのはイザルデである。

た。泉の水を汲もうとする者があれば、それが男であれ女であれ、その者の命を奪い、証拠として肝臓¹⁷⁾を持って来るようにと。(2996-3009)

二人は、報酬の銀に大いに気を良くして、見張りの場所へと出掛けていった。¹⁸⁾

一方、イザルデは、寝台に横たわり、気分が優れないのだとブランゲーネに話した。誠実なブランゲーネは同情して大層悲しんだ。すると不実な王妃は、果樹園に湧き出ている泉の水を汲んで持って来るよう彼女に命じた。¹⁹⁾

ブランゲーネは、王妃の頼みを拒みはしなかった。彼女は金製の水差しを手にとると、果樹園に入り泉の方へ進んでいった。すると、すぐに例の二人が見張り場所から飛び出してきた。彼らは、ブランゲーネがそもそも何の罪で罰せられるのか知らなかったが、彼女に向かって言った。

「あなたの命もこれまでですぞ」

「それはどういう意味ですか」誠実な人は尋ねた。

騎士の一人が答えた。

「あなたは生きていてはならぬのです」

「私の罪なら良く分かっています」とブランゲーネは語った。

「私は忠実さのために罰を受けるのです。王妃さまですね。私を殺すようお命じになったのは。(3010-3036) でも、どうか寛大な心をお見せになって、私をしばらくは活かしておいてください。神さまのためにそうなさってください。私はそのお礼ができませんので。それで、お二人の内の一人が、王妃さまのもとへ戻り、私は死んだと言ってください。その時に、私があなた達に話

したことを伝えてください。あの方が、私の何を咎めるのか、なぜ理由も無く私を亡き者にしようとなさるのか、私にはわかりません。神さまが御存知ですが、あの方がお怒りになって当然なことを、私がかつてしたことはありません。私は、あの方の幸せのためだけに、親も親類も捨てて、あの方に付き従って異国へ参ったのです。

(3037-3052) それなのに、こんなにも惨めに死ぬというのでしょうか。私たちが国を出て来るとき、あの方のお母様が、優しいお心から、私たちに二枚の上等な肌着²⁰⁾を下さいました。あの方にはきっとわかります。私が何の事を言っているか。私たちがこの国に着く前に、あの方の肌着は、傷んで裂けてしまいました。—よくお聞きくださいませ—²¹⁾、それであの方は、王様と一緒にお休みになるとき、それを着られなかったのです。

一方、私のものは、一度も着なかったもので、新しくてきれいなままでした。あの方は、それを貸して欲しいと私の忠誠心にすがって頼みました。私はいやいや応じました。(3053-3072) あの方が、あまり熱心にお頼みになるので、私は結局それをあの方にお貸ししたのです。私が、私の肌着を新しいままで海を渡ってこちらへ持参したということ以外に、あの方に伝えて貰うことはもうありません。それを私は、あの方が王様と床を共になさった最初の夜に、あの方にお貸しました。その時にあの方に使われて、傷んでしまいました。どうか、よく覚えておいてください、私があなた方に話したことを。そして、あの方にお伝えくださ

¹⁷⁾ G作では、イザルデが証拠として求めるのはブランゲーネの舌である。

¹⁸⁾ G作では、二人の「小姓」は、最初から案内役としてブランゲーネと共に森へ行く。

¹⁹⁾ G作のイザルデは、頭痛がするから薬草を探ってきてくれとブランゲーネに頼む。

²⁰⁾ 原文 *zway hemd gar clain* (3058)。G作では「雪のように白い二枚の肌着」*zwei hemedede wiz alsam ein sne* (12810)。G作の *Bechstein/Ganz* 版 12823 行への注によると、*hemde, hemedede stn.* は、日中にだけ身に着けられた衣類で、寝床では脱いだとのことである。ここでは「肌着」に象徴的な意味がある。

²¹⁾ 原文 *niempt der red war* -(3026)。Lichtenstein 版にも M 写本にも、この 1 行は出てこない。

い。不安に惑わされているだけなのです、私があの方からこんな不当な死を宣告される謂れはないと」(3073-3085)

ブランゲーネの話を聞いても、彼女が罰せられる理由が分からなかったので、騎士たちは気の毒に思った。同情に値する彼女の言葉が、彼女の命を守ったのであった。彼らもまた考えたのである。この女性を殺したならば、世間での彼らの名誉は永遠に地に墜ちるであろうと。

丁度そのとき、犬が一匹やって来た。騎士の一人がすぐにその犬を殺して肝臓を取り出した。彼はそれをシャツの中に入れると王妃のところへ密かに持っていった。(3086-3099)

王妃は彼に大いに感謝すると、彼を質問攻めにした。

「彼女は何か言いましたか」

「はい、言いました」

「何を言ったのか、お話しなさい」

そこで彼は王妃に伝えた。ブランゲーネが肌着について語った通りに、彼女がそれをやむを得ず忠誠心から王妃に貸したというのを。

イザルデはさらに尋ねた。

「彼女はもっと何か話しましたか」

「いいえ。もし私たちが彼女を生かしておいたなら、それだけで嬉しい、ということだけです」(3100-3110)

「神さまが私を呪うに違いない」

美しい王妃は嘆いた。

「私がこの世に生まれたことを、神さま、哀れと思し召せ。惨めな私は今どうしたらいいのでしょうか。こんなに恥ずべき過ちを犯したなんて。男であれ女であれ、二度と私を信じてはなりません。神さまが、私の名誉と命に、私が企らんだ殺害の報復をし

てくれますように」(3111-3121)

王妃は叫んだ。

「私なんか悪魔にさらわれるがいい」

彼女は我が身を激しく叩き、髪の毛を掻きむしった。

見張り場所から戻ってきた件の騎士は、王妃がこのように嘆く様子を呆然と見つめていた。

王妃のこの苦しみが、本当に悔やんでいくことの表れだと解ると、彼はこれ以上秘密にはして置けなかった。

彼は打ち明けた。

「お妃さま、ご安心下さい。ブランゲーネはまだ生きております。そのことを私は今心から喜んでおります。これまででは、このことをお話する勇気がございませんでした。それがあなたには不愉快であろうと、恐れていましたので」

「冗談はお止めなさい」

王妃は悲しげに言った。

「こんなやり方で彼女を失った後では、冗談を言う気にはなれません」

「お妃さま、誓って本当です。冗談ではございませぬ。ブランゲーネはまだ生きています。お望みとあれば、彼女をここへ連れて参ります」

「彼女が生きているなら、あなたのお手柄です」王妃は言った。

「あなたを一生裕福にしてあげます。信義にかけて約束します」

騎士は喜び勇んで現場へ戻り、相棒の騎士に王妃の意志を伝えた。これで二人とも安堵して喜び合った。

それから彼らはブランゲーネを伴うと大急ぎで王妃の部屋へと戻って行った。(3122-3155)

(続く)

テキストと参考文献

『八戸学院大学紀要』第 57 号、同第 64 号掲載の『トリストラントとイザルデ』(1)、同(3)の末尾参照。

4 参考テキスト (追加分)

Gottfried von Straßburg. *Tristan*. Nach der Ausgabe von Reinhart Bechstein herausgegeben von Peter Ganz. 2 Bde. Wiesbaden: Brockhaus 1978. (Deutsche Klassiker des Mittelalters Band 4)

使用辞典・語彙集

- ・ Beate Hennig, *Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. In Zusammenarbeit mit Christa Hepfer und unter redaktioneller Mitwirkung von Wolfgang Bachofer. 2., ergänzend bearbeitete Auflage. Tübingen: Niemeyer 1995
- ・ Benecke/Müller/Zarncke, *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866. Hildesheim・Zürich・New York: Olms 1986.
- ・ Matthias Lexer, *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*. 3 Bde. Leipzig: Hirzel 1872-1878. (Nachdruck 1979.)
- ・ Ders., *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*. Mit den Nachträgen von Ulrich Pretzel. 38., unveränderte Auflage. Stuttgart: Hirzel 1992.
- ・ 『初期新高ドイツ語小辞典』工藤康弘著、大学書林、2018年
- ・ 『中高ドイツ語辞典』古賀允洋編、大学書林、2011年
- ・ 『中高ドイツ語小辞典』伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一・松浦順子・有川貫太郎編著、同学社、1991年
- ・ 浜崎長寿『中高ドイツ語の分類語彙と変化表』大学書林、1986年

執筆者 (所属)

小澤昭夫 (健康医療学部人間健康学科)

『トリストラントとイザルデ』(3)の正誤表

頁、行	誤	正
104、下から 14	g 『風雅体本 トリスタン物語』	『風雅体本 トリスタン物語』